

早期白話における場所を表す疑問代名詞の歴史的変遷

西山, 猛

九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授 : 古代漢語文法、近世漢語文法、日中対照言語学

<https://hdl.handle.net/2324/18277>

出版情報 : 東ユーラシア言語研究. 1, pp.140-149, 2006-03-21. 東ユーラシア言語研究
バージョン :
権利関係 :



早期白話における場所を表す疑問代名詞の歴史的変遷

西山猛 (九州大学)

0 議論の前提として

古代漢語における場所を表す疑問代名詞の歴史的変遷はごく簡単に言えば、(1) 戦国期の『左傳』において「何+『動詞』」という形式が一般的なものとなり、(2) 『史記』秦漢部分において「『動詞』+何所」という新しい形式が生まれ、(3) 『世説新語』において「『動詞』+何處」という形式になり、次の近代漢語へと続いていくことになる¹。

ところでその次の段階である近代漢語のうち即ち早期白話において、場所を表す疑問代名詞はどのように変遷を続けていったのであろうか、というのが本稿の目的である²。

例えば早期白話の次の段階、即ち明清白話について言えば、明代白話小説の代表的作品の一つ『西遊記』では、次のような場所を表す疑問代名詞が登場する。

まずは古代漢語の形式を踏襲した「何+『動詞』」と「何」字を動詞に前置する形である。例えば「何在」という表現を 1 例挙げる。

(1) 忽問：「悟空何在？」悟空近前跪下：「弟子有。」(祖師はそこで尋ねた：「悟空はどこにおるのか？」悟空は前に進み寄って跪き、「わたしはここにおります。」) (『西遊記』第二回、p.20)

ここは祖師がまず悟空がいるかどうかを尋ねる最初の場面であるから、文言の基本的な形式「何在」を用いたのである。白話小説においても、このような文言の形式は多く用いられるようである。

¹ この問題については、既に西山 2005 において考察を試みている。

² 私は古代漢語と近代漢語の時期区分について、大まかに次のように考えている。

上古漢語：春秋戦国～前漢

中古漢語：後漢～初唐 以上古代漢語

早期白話：唐末～元

明清白話：明～清 以上近代漢語

また白話小説では古代漢語で完成された「何處」という形式も多く用いられる。例えば次の1例がある。

（2）龍王搖手道：「扛不動，擡不動，須上仙親去看看。」悟空道：「在何處？你引我去。」（竜王は手を振って答えた：「持ち上げることも担ぐこともできませんので、仙人自ら見に行ってください。」悟空は言った：「どこにあるのです？私を連れていってください。」（『西遊記』第三回、p.34）

ここでは、龍王から「神珍鐵」という武器を自ら見に行くように言われた悟空が、その場所を問う場面である。その際「何處」という語彙を用いているのである³。

しかしこの作品で圧倒的に多く用いられている語彙は、やはり「那裏」である。この語彙については枚挙に暇がないが、1例を挙げておく。

（3）悟空聞此言，滿眼墮淚道：「師父教我往那裏去？」祖師道：「你從那裏來，便從那裏去就是了。」（悟空はその言葉を聞くと、目にいっぱいの涙を流して言った：「お師匠さまは私をどこに行かせるおつもりですか？」祖師は言った：「お前が来たところに行けばよかろう。」）（『西遊記』第二回、p.23）

ここは祖師に許しを乞う場面であり、ここにおいては祖師に救いを求める気分でこの当時最も常用された語彙「那裏」を用いているのである。

このように明清白話においては「何+『動詞』」「何處」そして「那裏」という形式があり、その中でも「那裏」という語彙が常用されていたということがわかる。しかし問題はそれ以前、特に早期白話においてはどのような語彙が生まれ、そしてそれが変遷・消滅していったのかということである。

今回はそのテーマについて（1）どのような言語資料が早期白話のものとしてふさわしいかを選定し、（2）時期に沿ってその文法項目について具体的に記述してみることにする。

1 言語資料の選定について

³ その他細かく見てゆけば「何所」等の語彙を見出すことができるが、今回はこのことについては述べない。

こういった言語資料を用いるかということが特に近代漢語の研究においては最も重要であることは言を俟たない。例えば太田 1958 は pp.410-414 においてこのことを詳述している。所謂テキストの選定という問題である。

しかし私がここで特に問題にしたいのは、その中でも早期白話という資料、即ちその後の明清白話の前段階に位置する言語資料、即ち唐五代から宋元に至るまでの資料の、文体としての性格である。

例えばこの時期の資料としてまず挙げられるものとして、禅や儒家の語録がある。ここでは『祖堂集』を考えてみることにする。この資料は唐五代の禅の語録である。この文献については近年さまざまな研究がなされており、言語資料として重要であることは言うまでもない。文法現象に関しても、近年さまざまな研究が登場している。この資料を用いてさまざまな文法現象を禅の語録から導き出すことができる。

ただ私が問題にしたいのはそれが早期白話の資料になりうるかということである。禅の語録というものはそれぞれ一過性のものである。その言葉がその時期およびそれ以降において広く用いられたという保証は全くない。そういった意味ではこれは古代漢語の後漢以降において出現した所謂「漢訳仏典」と状況が似ている⁴。よって私は今回こういった禅や儒家の語録については扱わないことにする。

次に挙げられるものとして、各時代の所謂中国語教科書がある。例えば元代における『老乞大』がそれである。この文献は基本的には会話体によって書かれているが、一部散文体の箇所もある。この文献は元代の中国語会話を知る上での最も重要な資料であることは言うまでもない。

しかしさきほども述べたように、こういった資料はあくまでも「中国語会話資料集」といった性質のものである。口語体のものを漢字という文字で、ある意味苦心して書き留めていったものといってよい。後の明代清代の白話小説といった完成された文体とは大きな隔絶がある。よってこういったものもとりあえずは会話資料として、早期白話とは別個に措いておくことにしたい。

その他例えば元雑劇がある。しかし実際に残っているものは『元刊雜劇三十種』のように所謂「唱」の部分がほとんどであるし、なによりこういったジャンルは、口語を反映したものとは異なる、戯曲独特の表現からなると考えた方がよい。よってこういった

⁴ ちなみに漢訳仏典には、例えば『賢愚經』に「那得」といった語彙がある。初出という意味では重要であるが、疑問詞としての「那」の一般的な使用は時代が下がることになる。

ものは新しい書面語としての「白話」という文体には含めないこととする。

私が「早期白話」の資料とするものは、1) その当時の聞いて分かるような口語を十分反映したと思われるもの、2) その言葉が一過性ではなく幾度となく用いられたようなものであること、を基準として求めることにしたい。具体的なものとしては「敦煌変文」・『大唐三藏取經詩話』・『三國志平話』を挙げることにする。これらの作品を使用した理由については後で述べる。

今回は「早期白話」の文献における場所を表す疑問代名詞に関する初歩的な考察であり、そのことを通じてこういった資料を用いることが「早期白話」の性格を知る一端となると私は考える。以下各作品について述べていくことにしよう。

2 「敦煌変文」について

「敦煌変文」はおもに唐五代における仏教の寺院や街頭等で語られた仏教系・非仏教の語り物をもとにしたものであるといわれている⁵。おそらくその当時幾度も語られた内容であろう。語られた内容は実際に現在写本として残っているものとはいくらかは異なるであろうと思われるが、ただ言葉に当時の口語が大きく反映されたであろうことは推測できる。よって今回はこの文献を言語資料とすることにする。

今ここで具体的に「敦煌変文」における場所を表す疑問代名詞について見てみると、その形態は古代漢語のものと明らかに違う部分が見られる。

まずこの資料においても、古代漢語における最も基本的な「何+『動詞』」という形式がある。例えば「何在」で検索すれば7例あることがわかる。2例を挙げる⁶。

(4) 昭軍(君)一度登千山, 千迴下涙:「慈母只今何在? 君王不見追來。」(王昭君はある時には山に登り、いくつもの涙を流し:「慈母は今どこにいるのか? 君王は呼び戻しては下さらない。)(『敦煌變文集』卷一「王昭君變文」、p.102)

(5) 若不見路傍桃李年年花發, 曜日江(紅)顔, 伏今何在。(もし路傍の桃李が毎年花を開き、日々顔を見せることなどがなかったならば、今どこにいるのであろうか。)(『敦煌變文集』卷二「廬山遠公話」、p.179)

⁵ 「敦煌変文」の資料としての性格については、入矢 1975 を参照した。また中国における変文と俗語小説との関連性については小川 1968 に詳しい。

⁶ 例文(4)「王昭君變文」における「君王不見追來」句の解釈については金文京 1995 を参考にした。

このように特に自己の思いを述べるような箇所では「何在」というように古代漢語からの伝統的な形式に則った言い方をしている。

それからこの文献においては、古代漢語で完成された形式である「何處」が全体から見れば76例と最も多い。ここに2例を挙げる⁷。

(6) 君子是何處之人？姓名是甚？在此而坐？（そちらはどこの人ですか？姓名は何で、ここにお坐りですか？）（『敦煌變文集』卷二「前漢劉家太子傳」、p.160）

(7) 三公何處來？（三公はどこから来たのですか？）（『敦煌變文集』卷二「秋胡變文」、p.154）

これに対してこの文献では、おそらくこの時期あたりから現れるであろう「何所在」「甚處」「那裏」「那邊」といった語彙が出現することになる。

まずは「何所在」から見ることにしよう。この語彙は1例のみで、仏教の偈に出てくる言い方である⁸。

(8) 化身何所在，空留涅槃句（句），（化身はどこにおられるのか、空しく涅槃の句を留めるのみ、）（『敦煌變文集』卷二「廬山遠公話」、p.173）

次に「甚處」を見てみよう。全体的に見れば敦煌變文の新しい語彙においてはこの「甚處」が14例と最も多く、かつこの語彙は仏教系のみならず非仏教系資料にも現れる。2例を挙げる⁹。

(9) 後母一女把著阿耶：「殺卻前家歌（哥）子，交與甚處出頭。」（継母の娘がお母さんを引き留めて：「前の家のお兄さんを殺してしまったら、お兄さんはどこから頭を出せばいいの。」）（『敦煌變文集』卷二「舜子變」、p.132）

⁷ 「敦煌變文」の実際の写本を見てみると、「何處」が「何処」と書かれていたり、「那裏」が「那裡」「那里」と書かれていたりと多種多様である。後述の『大唐三藏取經詩話』『三國志平話』においても同様である。今回はこういった意味の区別に関わらない文字の異同については特に問題としないことにして、文献に依って「那裏」「那裡」等と随意に表記することにする。

⁸ ここは「何+所『動詞』」の形式、即ち古代漢語に元々からある用法にとることも可能であるが、一応「何+所在」という新しいものとして挙げておくことにする。

⁹ 「甚處」の例文(9)「舜子變」については呉福祥1996を参考にした。なお概書の論述形式は、例えば「甚」については「甚人」「甚事」等の語彙がある、というように進められており、本稿のような意味内容から語彙を求めるものとは異なっている。

(10) 交我將你，況甚處賣得你？（お前を連れて行って、いったいどこでお前を売れるのか？）（『敦煌變文集』卷二「廬山遠公話」、p.175）

ここでは継母が連れてきた娘がその母と、白莊という群賊が遠公と、それぞれ会話を交わす場面での用例である。このようにこの「甚處」という語彙はこの資料においては最も口語的色彩の濃いものといつてよいであろう。

またここでは「那裏」「那邊」といった語彙も登場してくることになる。4例及び6例であるが、ただ全て仏教系の資料に用いられることは「何所在」と同様である。それぞれ1例挙げる¹⁰。

(11) 玉貌定知皈那裏，且喜恩霑説修持，（玉貌はいったいどこにお帰りになるのだろうか、ありがたくも思し召しによって修行せよと説かれる。）（『敦煌變文集』卷六「歡喜國王縁」、p.779）

(12) 寶座令余何處得，蓮臺教朕那邊求？（宝座はいったい私はどこで手に入れ、蓮台はいったい私はどこで求めればよいのか？）（『敦煌變文集』卷五「妙法蓮華經講經文（一）」、p.496）

以上を纏めると、敦煌変文においては「甚處」という語彙が最も口語的なものであり、その他仏教系の語彙として「何所在」「那裏」「那邊」があるということがわかる。この傾向は宋以降になるとまた違ったものに変化することとなる。

3 『大唐三藏取經詩話』について

『大唐三藏取經詩話』は玄奘三蔵が西天にお経を取りに行く物語であり、後に『西遊記』へと結実してゆくものである。物語そのものはおそらく宋代に成立したものと思われる。この資料は語られた際、聞き手に配られた小冊子のようなものであったと想像され、その中に当時の口語がある程度反映されていると見てよい。よって今回はこの文献を言語資料にすることにする。

このテキストは「宋版」ということになっているが、ただ実際の版本そのものを見て

¹⁰ 「那裏」「那邊」の例文のうち、「阿那裏」「阿那邊」の形式を取るものもあるが、本稿ではその差異については述べてない。

みると元代に刷られたものではないかという可能性も浮かんでくる。しかしここではそのことの当否についてはひとまず措き、そこに現れている言語のみについて見てみることにしたい¹¹。

今回場所を表す疑問代名詞に注目してみると、まず「何處」という語彙が多く見られる。計8例であり、以下に2例挙げる¹²。

(13) 和尚今往何處？莫不是再往西天取經否？（和尚様はどこに向かわれますか？もしや再び天竺にお経を取りに参られるのではございませんか？）（『大唐三藏取經詩話』第二、p.235）

(14) 我新婦何處去也？（うちの新婦はどこに行ったのだ？）（『大唐三藏取經詩話』第五、p.239）

このようにこの文献には古代漢語から継承された「何處」があるが、その他「敦煌變文」にも見られた比較的新しい語彙もある。「何所在」「甚處」「那邊」がそれである。

まず「何所在」は次の1例である。

(15) 又過一山，山嶺崔嵬，人行不到，鴉鳥不飛，未知此中是何所在。（また山を一つ越えましたが、山路は険しく、人も通らず、鳥も飛ばず、ここがどこか分かりません。）（『大唐三藏取經詩話』第九、p.243）

このように語り手が聞き手に状況を説明する場面において、「何所在」という語彙が用いられている。

次に「甚處」も次の場面において用いられる1例がある。

(16) 汝是何方妖怪，甚處精靈？（おまえはどこの妖怪だ，どこの怪物だ？）（『大唐

¹¹ 『大唐三藏取經詩話』の言語については、太田 1997 においてその概要が述べられている。

¹² ここではこの2例の他に説明すべきものとして2例がある。1例目は「前去都無人煙，不知是何處所？」（この先には人家がないが、どこだろうか？）（『大唐三藏取經詩話』第十、p.245）であるが、この「不知是何處所」は「不知何處」を前句に口調を合わせて六言にしたのであろう。また2例目は「你道求請佛法，法在何處？佛在何方？」（あなたは仏法を求めに来たということだが、法はどこにある？仏はどこにある？）（『大唐三藏取經詩話』第十五、p.250）であるが、この「何方」は確かに「どこ」という意味である。しかしこの「何方」は「何處」と対になった言い方と考えるべきであろう。後述の「何方～，甚處～」における「何方」も同様である。ちなみにこの「何方」という言い方は後世には受け継がれなかったようである。

ここは猴行者が白虎精に対して言ったせりふである。このような場面において「何方」と対の形で「甚處」が使用されているのである。

その他「那邊」という言葉も登場する。次の1例である。

(17) 百萬程途向那邊、今來佐助大師前。(百萬の路程はどこへと向かう、今大師を助けて前へと進む。)『大唐三蔵取經詩話』第二、p.235)

ここは猴行者が作った詩の一部である。このように詩の言葉として「那邊」という語彙が使用されているのである。

この『大唐三蔵取經詩話』という言語資料は、現存しているものは一部欠損しており、また内容から見てもはさほど長いものではないが、おおまかな傾向をつかむことはできたのではないかと思う。即ちまず古代漢語から継承されてきた語彙「何處」が広く使用されており、「敦煌変文」あたりから現れてくる新しい語彙としては「甚處」が登場人物のせりふなどで用いられ、その他状況説明や詩の部分において「何所在」や「那邊」が用いられるということである。総じて言えばいくつかの語彙が混在しているといった状況である。

4 『三國志平話』について

『三國志平話』は元代に刊行されたもので、後の『三国志演義』へと繋がる物語である。この資料はおそらく聞き手が演芸場で求めたであろうパンフレットのようなものであり、先の『大唐三蔵取經詩話』に比べて読者が十分読むに堪えうるような内容・表現が随所に見られる¹³。そこで語られた内容はもちろん何回も行われてきたものであり、資料として扱うに足るものと言える。よって今回この文献を言語資料とすることにする。

この資料を一見して分かることは、この資料は「敦煌変文」や『大唐三蔵取經詩話』において混在していた語彙が整理されているということである。

まずこれまでと同様、古代漢語において完成された「何處」という語彙がこの『三國志平話』においても多く見られる。計13例であり、ここでは2例を挙げる。

¹³ 『三國志平話』の資料としての性格については、中川1999に詳しく述べられている。

(18) 帝大怒，問八人：「漢高祖在何處？」（皇帝は大いに怒り、八人に問うた：「漢の高祖はどこにいる？」）（『三國志平話』卷之上、p.373）

(19) 猛然見貂蟬推衣而出，呂布大怒：「逆賊在於何處？」（そこへ突然貂蟬が衣服を身に付けつつ出てきたので、呂布は大いに怒って言った：「逆賊はどこにいる？」）（『三國志平話』卷之上、p.392）

このように特に第三者に対して強い口調で述べる際に「何處」という言い方が用いられるようである。

これに対して口語性の強い語彙はこの文献においては一つに統一される。それは「那裡」である。計5例であり、ここでは2例を挙げる。

(20) 玄德令軍把了寨，點視諸將，問軍：「趕賊那裡去也？」（玄德は軍に命じてとりで守らせ、諸將を点呼して、軍に問うた：「賊をどこに追いやったのか？」）（『三國志平話』卷之上、p.381）

(21) 太守那裡宿睡？你若不道、我便殺你！（太守はどこで寝ている？もし言わなければ、お前を殺す！）（『三國志平話』卷之上、p.385）

このように『三國志平話』においては、口語的な表現の場合には「那裡」という表現のみを用いており、「甚處」「何所在」等の語彙は用いられていない。ここに元代のこの文献において、場所を表す疑問代名詞は後の明代へと連なるものによって変わっていったことが見てとれるのである。

5 本稿のまとめ

本稿によって明らかになったことは、（１）「敦煌変文」においては「甚處」という語彙が最も口語的なもので、「何所在」「那裏」「那邊」といった語彙もあり、（２）『大唐三藏取経詩話』においても「甚處」が登場人物のせりふなどで用いられ、その他「何所在」「那邊」といった語彙があり、（３）『三國志平話』においてはそれが「那裡」に統一される、ということである。

一般的な理解としては、唐末五代の「敦煌変文」に対して、宋代の『大唐三藏取経詩話』や元代の『三國志平話』が現れ、それをもとに明代清代の白話小説が生まれてきた、

とされているようである。しかし実際の『大唐三蔵取經詩話』に現れた言語はむしろ「敦煌變文」との関連性が強く、『三國志平話』は後の明清白話との関連性が強いといった状況が見られるのである。本稿で今回見てきたものはそのごく基本的な文献に過ぎない。今後さらに綿密な論証が必要であると私自身痛感している次第である。(2006年1月)

テキスト

1. 『敦煌變文集』(王重民他編、人民文学出版社 1957 年本)を底本とし、『敦煌變文選注』(項楚著、巴蜀書社 1990 年本)、『敦煌變文集新書』(潘重規編著、文津出版社 1994 年本)『敦煌變文校注』(黃征、張涌泉校注、中華書局 1997 年本)を参照した。
2. 『近代漢語語法資料彙編(宋代卷)』(劉堅・蔣紹愚主編、中華書局 1992 年本)所収「大唐三蔵取經詩話」を底本とし、日本大倉文化財団蔵宋版『大唐三蔵取經詩話』影印で文字を確かめた。
3. 『元刊全相平話五種校注』(鍾兆華著、巴蜀書社 1990 年本)底本とし、日本内閣文庫所蔵『至治新刊全相平話三國志』及び『三國志平話』(上海古典文學出版社 1955 年本)に依り字体等を改めた。
4. 『李卓吾評本西遊記』(上海古籍出版社 1994 年本)に依る。

参考文献

- 太田辰夫 1958『中国語歴史文法』(江南書院)
小川環樹 1968「變文と講史」『中國小説史の研究』(岩波書店) pp.125-145 (初出は 1954 年『日本中國學會報』6)
入矢義高 1975「解説・變文」『仏教文学集』(平凡社中国古典文学大系) pp.425-427
金文京 1995「王昭君變文考」『中國文學報』(京都大学中国文学会) 50、pp.81-96
呉福祥 1996『敦煌變文語法研究』(岳麓書社)
太田辰夫 1997「大唐三蔵取經詩話補説」『大倉文化財団蔵宋版大唐三蔵取經詩話』(汲古書院) pp.155-169 (初出は 1960 年平凡社中国古典文学全集)
中川諭 1999「『三國志平話』について」二階堂善弘・中川諭訳注『三國志平話』(光荣社) pp.1-12
西山猛 2005「古代漢語における場所を表す疑問代名詞の歴史的変遷」『中国文学論集』(九州大学中国文学会) 34、pp.119-130